

## メープルレター（84）

皆既日食、帰って来た猫と亀、

春がないまま、雨が降り続き、いっぺんに初夏になってしまいました。チューリップの花が公園を埋めつくし、林檎の花も白い花を一杯に咲かせ、リラは街角に芳香を漂わせています。やっと美しい季節になった（？）ようです。

賑やかなのは花の世界よりも、我が家の前の道路工事の方が上かもしれません。3月末に2年がかりの大工事が始まりました。電気、電話などの配線、水道の配管、下水の配管を新しくするようです。何でたった50メートルほどの道路の工事で2年かかるのか、いまだに疑問ですが、工事の音の割には遅々として工事は進んでいないような気がします。朝7時から早くても夕方4時か5時まではダダーダーの恐ろしい工事音やピーピー言いながら絶え間なく動き回るダンプカーで、オールドモンリオールの観光名所の通りがガザの戦場のように荒れ果てた姿になってしまいました。工事のない週末は耳と心がくつろぎます。

4月始めはイースターの代替え休暇でした。娘夫婦が孫を連れやってきました。近所のケーキ屋さんで待ち合わせ、ケーキや菓子パンと美味しいコーヒーでまず一息いれました。孫はレストランが好きで、このケーキ屋さんでは美味しいケーキ探しで必死でした。この後は、港の公園をゆっくり散歩と思いきや港の隅にある大観覧車に乗ると言い出しました。マダム田中は、大昔、三歳の姪を連れて乗った大観覧車の悪い思い出がフラッシュバックしてきます。

「ばーばは、高い、くあるくる回るのは余り好きじゃないからパス。ママと乗って。」

「ばーば、大丈夫よ、高くても、怖くないよ。ずっと手を握っていてあげるから」

口だけは達者になりました。過激なものが好きな孫は、大観覧車に興奮していました。しかも、この観覧車はなんと3回も回るので。

「港が小さくみえるー！！」

大きく見えても小さく見えても、どうでもいいから早く降りたい。。。そう念仏のように唱えるマダム田中には港の景色など目に入るわけがありません。

そして1週間後。国を挙げての皆既日食見物でした。この次の皆既日食は180年後らしく、国民全員にとっての一生に一度の皆既日食になりました。学校は休校、職場は欠勤も多く、もうお祭りです。我が家のある港は、何万人もの人でうまり、向いの島はテレビの中継所となり、空間のある場所はどこもかしこも、皆既日食の見物人で埋まっていました。我が家の建物では、アパートの住民が、友達や親戚を集めテラスに陣取り、飲めや歌えの宴会をしていました。太陽が隠れ始める頃、全員が皆既日食用の黒メガネをかけ、同じ方向に向かって一斉に方向転換です。異様な光景でもありました。テラスの人たちも例外なく同じ方向に向かっていました。見事に月と太陽が重なった瞬間は拍手喝采となり、喚声があがりました。皆既日食はほんのわずかのことでした。

我が家ですか、我が家は、折しも、ドリトル先生が背中中の筋肉を傷め、一步も動けず、家の中の移動も杖をつき、やっと一步あるけるかどうかでした。マダム田中は、苦しみドリトル先生を放り出して、黒メガネをかけてテラスに出るわけにもいかず、テラスに出れば、近所の人達と出くわすことにもなりますので、動けないドリトル先生とテレビと一緒に皆既日食を見ることとなりました。その後は、折しも日本からやってきていた友人の娘と一緒に娘一家がやってきて早めの夕食となりました。この日は、どの家も大宴会です。マダム田中は、皆既日食の間はお料理をしておりました。

2週間ほど何事もなくと言いたいところですが、ドリトル先生が今度は膝を痛め、またまた動けない状態となりました。どうにかクリアしたころ、義理の長男が、

「パパ、トルコに2週間ほど行くだけで猫と亀を預かってもらえるかなあ。」

と連絡をしてきました。

「パパではなく、私に言って、パパは、にこやかにいいよと返事をするだけで、するのは私だから。」

「そうだよ。和子、預かって。猫も亀も和子なら幸せだと思うから。」

何と調子のよいことか。というわけで、猫と亀が戻ってきました。しかも、今回は亀が二匹に増えています。マダム田中が目覚めると、猫二匹が、寝室のドアの前で気をつけの如くしっかりと待っています。

あー猫の朝ごはんだー。動物に待つというわけにもいかず、目覚めるやいなや餌やりに忙しく、その合間をぬって亀の水をかえて餌やりです。こうして忙しく日が過ぎていきます。猫の一匹は毛足が長く、猫アレルギーのマダム田中はくしゃみと鼻水に悩む日でもあります。一体、長男は何時引き取りにくるのでしょうか。何時アレルギーから解放されるのでしょうか。

猫たちと暮らす日々の中、日本館での定期いけばなの華道展があり、活けこみやオープニングセレモニーや小さなデモンすよレーション、会場でのお客様の応対など忙しく1週間が過ぎていきました。高齢化でメンバーが少なくなり、華道展の参加者もどんどん減っていくいけばな界ですが、それなりにやりくりをし、楽しい時を友人たちと過ごしていた日々でもありました。日に3千人以上の方が訪れてくれます。たった1本の花でも、いけばなになると、世界が広がり、友情も培われていきます。日本文化の優れた隠し味で美しい花が文化に変わっていきます。それにつけても、疲れた日々ではありま